英國の子供小說

オリバー・ツイスト（第四）

永代美知代

オリバーはシツケス等に强迫されて、或る家へ强盜に忍び込んだ。而して、もう死んだつて生きたつて構はないから、裏切りして家のものを呼び起してやらうと思つて居ると、いきなりシツケスは、

『歸れ〳〵、歸つて來い！』

と怒鳴つて、自分のピストルを放した。

『しつかりしろ！　手負だ！』

言ひながらシツケスは、オリバーを窓の外へ突き下したが、けだゝましいベルが鳴つて、夜警が驅けつけた。シツケス等はもう手負のオリバーに構つてはゐられない、そのまゝ其處に打遣つて、自分達は一目散に暗に姿をかくしてしまつた。冷たい風がひいやりと胸に當つたと感じたオリバーは、またそこに倒れて氣を失つた。

斯うして手負のオリバーは、長い夜寒の一晩中、そこに倒れた切りで居た。曉方から篠突くやうな暴雨になつたが、オリバーは夢中である。だが、終に苦しい唸聲にわれと氣がついた。血みどろの手を振り動かして、幾度と無く立ちかゝつて、倒れた。雨は猶降り續けてゐる、その冷たい滴が突刺すやうにオリバーをそそつた。最後の力をこめて起き上つた。此儘にして居ては死ぬ外はないと感じたのである。丁度泥棒に押入つた家の前へ來た。オリバーは直ぐそれを知つたが、かう力が盡きて一歩も動き得ない、到頭玄關前の戸の傍に倒れてしまつた。

間もなく戸を開けた僕達は、オリバーを見て驚いた。昨夜の泥棒だとは直ぐ氣づいたが可哀さうに思つて家へ連れ込んで寢床に寢かせた。そして外科醫を迎へてやるのであつた。此處の家には非常に憐れみ深いメリーと云ふ夫人が、その養女で姪に當るローズ孃と二人で住つてゐた。二人はオリバーを痛はつた。まる

で此前のヴラウンロー氏のやうに、何彼と親切に氣をつけた。オリバーの無邪氣な晴れやかな顏に引きつけられたのである。不思議な身の上話を聞くと、氣の毒に思つて、僕達には堅く前夜の出來事を口止めした。

それでオリバーは牢へ行く事もなくて濟んだのだ。その上、斯うした溫かな家庭に居て、もう〳〵暗い過去から離れてしまつたやうにも見えた。オリバーは又ヴラウンロー氏の處でやりかけた勉强を初めて、大好きな讀書をし出した。併しまだ病後に必要な養生に氣をつけて、戸外の新らしい空氣を吸つた、顏色もよくなる、體も丈夫になつたオリバーは、ローズ孃の好いお相手であつた。

或る日の午後、夕暗の迫つて來る時分の事である。オリバーは部屋の窓にもたれて本を讀んで居たが、何時の間にか眠くなつて來た。オリバーはよく解つて居ながらうと〳〵眠つて了つた。と、急に四圍の樣子が變つて、オリバーは又猶太人の家に捕まつてゐる。猶太人が自分を指したと思ふと、又一人の惡黨を振り向いた。

『奴に相違ないよ。』

『さうだとも、間違ひつこはない。』

惡黨の話聲を聞くと、オリバーは驚ろいて飛び起きた。見ると窓の外に猶太人が立つて居る、たつた一度見ただけではあるが、其傍に陰險な顏付をした惡黨が居る。それはほんの一眼、一寸見たきりだけれど、オリバーは蟲が知らすかして恐くつて堪らない。

で、大聲を擧げて助を求めた。何處にも猶太人の群は居なかつた。みんなは屹度又オリバーが熱に浮かされたのだと云ひ合つた。だがオリバーは間違つて居なかつた。窓外の二つの影は、矢張り猶太人とモンクと云ふ男とであつた。モンクは或る祕密な譯があつて、オリバーの命をねらふ敵となつて居た。此男が二度目にオリバーの所在を突き止めて、二人で力を合せ、如何がなして盜み出さうと目論んで居た。

このオリバーの危機一髮と云ふ場合に當つて、乞食娘のナンシーが悔い改めた。ヴラウンロー氏から誘拐

した事を甚く後悔して、是非その罪亡ぼしにオリバアを助けたいと思つた。猶太人とモンクの相談を立聞して、急いでローズ嬢に密告した。ローズ嬢は驚いて思案に暮れた。すると、ナンシーの出て行くのと引違ひにオリバーが歸つて來た。ヴラウンロー氏が馬車で歩いて居るのを見つけて、番地を突止めて來たと云ふのである。ローズ嬢はこの場合、非常に有力な相談相手を得た事を喜んだ。すぐ馬車を呼ばせて、五分間後には二人は戸外に出て居た。先方へ着くとオリバーを馬車の中に待たせて置いてローズ嬢は案内を乞ふた。そして直ぐ二階へ通されて、ヴラウンロー氏に迎へられた。初對面の挨拶を了ると、ローズ嬢は斯う云つた。

『以前お世話をなすつて下すつた私の親友の事で御相談に上つたのですが、オリバー・ツイストを御存知でいらつしやいませう。』

『オリバー・ツイスト！』

ヴラウンロー氏は飛び上つて驚いた。

『もしオリバーの身の上について何か近況を御存じなら、是非々々お話し下さい！』

そこでローズ嬢はその後の事を掻いつまんで話した。オリバーの生命が甚く危險な事を話すと、ヴラウンロー氏は何故つれて來なかつたかと云ふ。

『實はオリバーはまだ何も知りませんので、あなたに丈け惡者の事を御相談申上げ度いと思ひまして、あの、戸外に待たしてありますの。』

『戸外に！』

顔色を變へて室を出たヴラウンロー氏は、やがてオリバーと一緒に歸つて來た。二人は泣きながら、そして笑ひながら話を交はした。

ローズ嬢は四五日後の晩、ロンドン橋でナンシーと出會ふ約束をして。その時ヴラウンロー氏も一緒に行くことにして、一方惡者共を召取る手筈をする事にした。で、その日はそのまゝ氏に別れて、二人は家に歸つた。

するうちに猶太人はナンシーの素振を疑ひ出した。で、その頃ロンドンへ新しく入つて來た、何か惡い仕事はないかと探して居たノアと云ふ男を使つて、ナンシーの間諜にした。ノアはロンドン橋で三人が話して居る後をそつとつけて、全部話を立ち聞くと、急いで猶太人にその通りのことを知らせた。（つゞく）

▲仙臺の三少女にお答へ申します。——お手紙の意味はよく解りました、いろ〳〵御忠告下さつて、ありがたく御禮を申しあげます。一誌上でお答へ申しもよいのですけれど、あまりくだ〳〵しくなつて、多數の讀者に御迷惑をかける恐がありますから、御住所をお知らせ下さつたら、直接に手紙でお返事いたします。（笠峰）